

第三回 第一章「聖書について」

第3回 なぜこの六十六巻なのか

第二節

はじめに

前回は、ウェストミンスター信仰告白第一章第一節を通して、「神はなぜ聖書を与えてくださったのか」ということを学びました。神は天地万物を通してご自身を現しておられます。しかし、人間が罪に陥ったため、その啓示だけでは神を正しく知ること、救いの道を知ることできません。そこで神は、預言者たちと使徒たちを通して語られた御言葉を書き記させ、教会に聖書を与えてくださいました。そして、その特別な啓示は使徒時代をもって完結し、今日、神は聖書を通してご自身を語ってくださることを学びました。さて、今日はその続きとして、第一章第二節を取り上げます。第二節を開くと、最初は少し戸惑われるかもしれませんが、そこには、創世記から始まり、出エジプト記、レビ記、民数記……と、聖書の書名が延々と並んでいます。「これは信仰告白というより、聖書の目次ではないだろうか。」そのように感じられる方も少なくないでしょう。しかし、ウェストミンスター会議の神学者たちがここで行っていることは、単に目録を作ることはありません。彼らはここで、教会の信仰を告白しています。それは、「**私たちは、この六十六巻を神の言葉として受け入れます**」という告白です。考えてみれば、これは決して当たり前のことではありません。世界には、聖書と呼ばれる書物が数多く存在します。ローマ・カトリック教会が聖書に含めている書物もありますし、古代教会には礼拝で読まれていた敬虔な文書もありました。近年では『トマスによる福音書』や『ユダの福音書』などが紹介され、「本当は聖書から除外された福音書ではないか」と語られることもあります。そのような中で、なぜ教会は創世記から黙示録までの六十六巻を聖書として受け入れてきたのでしょうか。教会が後から決めたのでしょうか。ある会議で投票して決めたのでしょうか。それとも、もっと別の理由があるのでしょうか。今日の講義では、そのことを一緒に考えていきたいと思います。

本日の学び

今日の講義では、次の三つのことを学びます。第一に、「正典（せいてん）」とは何かを理解することです。第二に、なぜウェストミンスター信仰告白が聖書六十六巻を一冊ずつ列挙しているのか、その意味を考えます。そして第三に、改革派教会は「教会が聖書を決めた」とは考えず、「神が与えられた聖書を教会が受け取った」と告白していることを学びます。この三つを心に留めながら、ご一緒に学びを進めてまいりましょう。では、本文に入ります。

今回は、「正典とは何か」を中心に据えます。しかし、単なる語源の説明ではなく、「なぜウェストミンスター信仰告白がこの問題から始めるのか」が分かるように進めたいと思います。

一 「正典」とは何か

それでは、まず「正典」という言葉について考えてみましょう。「正典」という言葉は、普段の教会生活ではあまり耳にしないかもしれませんが、しかし、ウェストミンスター信仰告白第一章を理解するためには、この言葉の意味を正しく理解することが欠かせません。「正典」

は、ギリシア語のカノーン (*kanōn*) という言葉に由来します。この言葉はもともと、「まっすぐな葦の棒」を意味しました。そこから転じて、「物差し」「基準」「規準」という意味で用いられるようになります。使徒パウロもこの言葉を用いています。例えば、ガラテヤ人への手紙六章十六節では、「この基準 (*καὶ νόμος*) に従って歩む人々」と語っています。ここでは、「神が示された規準」という意味で使われています。教会はこの言葉を借りて、「信仰と生活の唯一の規準となる神の書物」を**正典**と呼ぶようになりました。

ここで注意していただきたいことがあります。正典とは、「価値のある本」という意味ではありません。また、「教会が重要だと判断した本」という意味でもありません。もっと根本的な意味があります。それは、「**神が教会にお与えになった書物**」ということです。ですから、正典の権威は教会から与えられるものではありません。神が語られたゆえに、初めから権威を持っているのです。改革派教会は、この点を非常に大切にします。

二 教会は聖書を決めたのでしょうか

ここで、一つ質問をしてみたいと思います。「**教会が聖書を決めた**」という言葉聞いたことがあるのでしょうか。おそらく、一度は耳にしたことがあると思います。歴史の本などでも、そのように説明されることがあります。しかし、この言い方は、半分は正しく、半分は誤解を招く表現です。確かに、四世紀の教会会議では、どの書物を教会で朗読すべきかが確認されました。しかし、その会議が「これを聖書にしよう」と新たに決めたわけではありません。ここで、一つ身近な例を考えてみましょう。戸籍に子どもの名前が記載されたからといって、その日から子どもが存在したわけではありません。子どもはすでに生まれていました。戸籍は、その事実を公に確認しただけです。正典も同じです。教会会議は、神の言葉を神の言葉にしたものではありません。神の言葉として教会に与えられてきた書物を、公に確認したのです。この違いは、とても大切です。もし教会が聖書を決めたのであれば、教会は聖書よりも上に立つことになります。しかし、宗教改革者たちは、そのようには考えませんでした。カルヴァンは繰り返し語ります。教会は神の言葉の母ではなく、そのしもべである。少し表現を補えば、**教会は御言葉を生み出す共同体ではなく、御言葉によって生かされる共同体**なのです。この考え方は、ウェストミンスター信仰告白第一章全体を貫いています。

三 なぜ第二節は書名を一冊ずつ列挙しているのでしょうか

そこで、改めて第二節を見てみましょう。創世記。出エジプト記。レビ記。民数記。申命記。……このように、一冊ずつ丁寧に列挙されています。私たちなら、「旧約三十九卷、新約二十七卷」と一行で済ませてしまうかもしれません。それでも意味は通じるように思えます。では、なぜウェストミンスター会議は、これほど丁寧に書名を並べたのでしょうか。それには、十七世紀という時代背景があります。宗教改革によって、「何が神の言葉なのか」が改めて問われました。特に問題となったのは、外典（ローマ・カトリック教会では「第二正典」と呼ばれる書物）をどのように位置づけるかという問題でした。そのような状況の中で、ウェストミンスター会議は、教会が受け継いできた正典を曖昧にせず、一冊一冊を明記したのです。これは、論争のためというよりも、**教会を守るための告白**でした。教会が礼拝で読むべき御言葉は何か。説教の土台となる書物は何か。信仰と生活の唯一の規準は何か。それを明確に示す必要があったのです。

四 旧約聖書は三十九卷でしょうか、それとも二十四卷でしょうか

ここで、少し興味深い問題を考えてみたいと思います。皆さんがお使いの聖書を開くと、旧約聖書は三十九巻あります。創世記から始まり、最後はマラキ書で終わっています。ところが、ユダヤ教では旧約聖書は二十四巻と数えます。では、どちらが正しいのでしょうか。実は、**どちらも正しいのです**。違うのは内容ではなく、「数え方」です。たとえば、私たちが「サムエル記上」「サムエル記下」と呼んでいる書物は、もともとは一つの巻物でした。列王記も同じです。歴代誌も同じです。また、ホセア書からマラキ書までの十二小預言書は、一冊の巻物として扱われていました。そのため、ユダヤ教では二十四巻になるのです。つまり、内容は私たちの旧約聖書とまったく同じです。言い換えれば、「本棚への並べ方」が違うだけなのです。ですから、「ユダヤ教の聖書とキリスト教の旧約聖書は違う」と考える必要はありません。私たちは、主イエスがお読みになったのと同じ聖書を受け継いでいるのです。

五 主イエスはどのような聖書を読まれたのでしょうか

それでは、その主イエスご自身は、どのような聖書をお読みになっていたのでしょうか。この問いは、正典を考える上で非常に重要です。復活された主イエスは、弟子たちにこう語られました。「わたしについて、モーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ずすべて成就する」（ルカ 24 章 44 節）。この御言葉は、単に三つの書物を挙げているのではありません。当時のユダヤ人が聖書を分類していた方法を示しています。第一に、「律法（トーラー）」です。創世記から申命記までの五書です。第二に、「預言者（ネビーイーム）」です。ヨシュア記から列王記、さらにイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、十二小預言書などが含まれます。第三に、「諸書（ケトゥービーム）」です。詩篇をはじめ、箴言、ヨブ記、ダニエル書、歴代誌などが含まれます。主イエスは、この三つを挙げることによって、「**聖書全体**」を指しておられるのです。ここに改革派教会が旧約正典を理解する上での大きな根拠があります。私たちは、教会が後から選び直した聖書を読んでいるのではありません。主イエスが神の言葉として受け入れられた聖書を受け継いでいます。ルカ 24 章 44 節で主イエスは、「モーセの律法と預言者と詩編」と語られました。これは当時のユダヤ教に広く見られた聖書の三部構成を反映していると理解されています。しかし、この御言葉だけから、現在私たちが手にしている旧約聖書の書名や境界が、すでに最終的な形で確定していたと結論づけることはできません。むしろ、この言葉は、イエスがイスラエルに伝えられてきた権威ある聖書全体を神の御言葉として受け止めておられたことを示しています。その具体的な形成過程については、第二神殿時代の写本資料やユダヤ教文献を丁寧に検討する必要があります。

六 神はイスラエルに御言葉を託されました

使徒パウロも、このことをはっきり語っています。ローマ人への手紙 3 章 1～2 節です。ユダヤ人にはどんな優れた点があるのか、という問いに対して、パウロは最初にこう答えます。「彼らには神のことばが委ねられたのです」。ここで言う「神のことば」とは、旧約聖書です。神は、アブラハムを召し出し、その子孫であるイスラエルを選び、長い歴史の中でご自身を現されました。モーセを通して律法を与え、預言者たちを遣わし、その御業を書き記させました。つまり、旧約聖書は、イスラエルという民に託された神の啓示なのです。教会は、その宝を横から奪ったのではありません。キリストにあって、その約束の成就を見た者として受け継いだのです。ですから、旧約聖書は「ユダヤ教の聖書」で終わるものではありません。同時に、「キリスト教が新しく作り替えた聖書」でもありません。神がイスラエルに託

され、キリストにおいて完成へと導かれた救いの歴史の証言なのです。このことを理解すると、旧約聖書の読み方そのものが変わってきます。創世記も、レビ記も、歴代誌も、預言書も、それぞれがキリストへと向かう一つの大きな物語の中に位置づけられるからです。

七 第二神殿時代には正典は完成していたのでしょうか

ここまで、「正典」とは何か、そして教会は正典を作ったのではなく受け継いだことを見てきました。そこで次に考えたいのは、「では、その正典はいつ成立したのでしょうか。」という問題です。皆さんは、この問いにどのような答えを思い浮かべるのでしょうか。かつては、「紀元 90 年頃のヤムニア会議で旧約聖書の正典が決定された」という説明が、多くの入門書に記されていました。私も神学校時代には、そのように教えられた記憶があります。しかし、現在では、この説明は大きく見直されています。まず、「ヤムニア会議」と呼ばれるような、公会議形式の集会が開かれ、そこで旧約正典が正式に決定されたという確かな史料はありません。むしろ、研究が進むにつれて見えてきたのは、正典形成とは一度の会議で決まるような出来事ではなく、**神の民が長い歴史の中で神の御言葉を受け取り、読み、礼拝の中で用い続ける歩み**であったということです。つまり、「ある日突然、正典が成立した」というよりも、「歴史の中で神の民が神の御言葉を受け継ぎ、その権威を確認していった」という理解の方が、史料にもよく合っているのです。

八 死海文書が教えてくれたこと

この理解を大きく前進させたのが、二十世紀最大の考古学的発見の一つと言われる**死海文書**です。1947 年以降、死海の北西にあるクムランの洞窟から、数百点に及ぶ写本が発見されました。その中には、私たちが旧約聖書として読んでいる書物の写本も数多く含まれていました。一方で、それらと並んで、共同体の規則や祈り、黙示文学なども大切に保存されていました。ここから分かることは何でしょうか。それは、第二神殿時代のユダヤ教には、すでに高い権威を認められていた書物が存在した一方で、その周囲には敬意をもって読まれるさまざまな宗教文書も存在していた、ということです。したがって、「正典」と「それ以外」の境界を、現代の私たちが考えるほど単純に描くことはできません。しかし、それは「何でも聖書だった」という意味でもありません。むしろ、律法を中心とし、その周囲に預言者や諸書が位置づけられるという秩序が、すでに形成されつつあったことがうかがえます。この点で、死海文書は、「正典は完成していなかった」ということを証明したのではなく、**正典形成が歴史的な過程であったこと**を具体的に示してくれたのです。

九 歴史を通して神は教会を導かれた

ここで、ウェストミンスター信仰告白に立ち返ってみましょう。信仰告白は、正典がどのような歴史的経過を経て形成されたかを詳しく説明してはいません。その関心は別のところにあります。それは、「**現在、教会が受け取っているこの六十六巻は、神が教会にお与えになった聖書である**」という信仰の告白です。歴史学は、「どのような過程を経て現在の正典が成立したのか」を探究します。一方、信仰告白は、「神はその歴史を通して教会を導かれた」と告白します。この二つは、対立するものではありません。歴史学は歴史を明らかにしようとし、神学は、その歴史の中における神の導きを証しします。私たちは、その両方に耳を傾けることが大切です。もし歴史を無視すれば、信仰は根拠を失います。逆に、神の導きを見失えば、歴史は単なる人間の営みにしか見えなくなってしまいます。ウェストミンスター

一信仰告白が私たちに教えているのは、この両者を分けることではなく、神が歴史を通してご自身の御言葉を教会に守り伝えてくださったという確信なのです。

十 ヨセフスは何を証言しているのでしょうか

第二神殿時代の終わり頃を知る上で、私たちにとって非常に貴重な証人がいます。それが、一世紀のユダヤ人歴史家 Flavius Josephus です。ヨセフスは『アピオンへの反論』第一巻八章で、ユダヤ人が権威ある聖なる書物として受け継いできた文書について述べています。彼は、その数を**二十二巻**としています。私たちの旧約聖書は三十九巻、現在のユダヤ教では二十四巻ですから、「二十二巻」という数字は少し不思議に思われるかもしれません。しかし、ここで大切なのは数字そのものではありません。ヨセフスが伝えようとしているのは、**ユダヤ人には、古くから特別な権威をもつ限られた書物が存在していた**という事実です。彼はさらに、それらの書物について、「誰も勝手に増やしたり、減らしたり、書き換えたりしようとはしない」という趣旨のことを述べています。もちろん、この証言だけで「一世紀には正典が完全に確定していた」と結論づけることはできません。また、ヨセフス自身が二十二巻という数え方を採用した理由についても、研究者の間にはさまざまな議論があります。しかし少なくとも言えることは、第一世紀のユダヤ社会には、他の宗教文書とは区別される「権威ある書物」の集合についての強い意識が存在していたということです。これは正典形成の歴史を考える上で、非常に重要な証言です。

十一 「正典」は歴史の中で成熟していった

ここで、一度整理しておきましょう。これまで見てきたことをまとめると、次のようになります。第一に、律法は非常に早い時代から神の権威ある御言葉として受け入れられていました。第二に、預言者の書も礼拝共同体の中で読み継がれ、その権威が広く認められていきました。第三に、諸書については長い歴史の中で受容が深まり、神の民の歩みを通して現在の形へと成熟していきました。つまり、「ある日突然、完成した」というよりも、**神の民の礼拝と信仰生活の歴史の中で、神がご自身の御言葉を守り導かれた**と理解する方が、歴史資料にもよく適っています。ここで忘れてはならないのは、正典形成の主体は人間ではなく神ご自身であるということです。もちろん、歴史の表面に現れるのは、人々が読み、写し、礼拝で朗読し、次の世代へ伝えていく姿です。しかし信仰の目で見ると、その歩みを導いておられるのは神です。この点で、ウェストミンスター信仰告白は非常に慎み深い姿勢を示しています。信仰告白は、歴史の細かな経過について断定しません。しかし、その結果として教会が受け継いでいる六十六巻を、神の御言葉として受け入れることを明確に告白しています。歴史研究が進むことによって、その告白が揺らぐわけではありません。むしろ、歴史研究は、神がどのような歴史を通して教会を導いてこられたのかを、私たちにより豊かに理解させてくれるのです。

十二 だから第二節は「信仰告白」なのです

このことを理解すると、ウェストミンスター信仰告白第一章第二節の意味が見えてきます。神学者たちは、創世記から黙示録までを、わざわざ一冊ずつ書き並べました。それは、歴史学の結論を示すためではありません。また、他者との論争だけを目的としていたわけでもありません。彼らがここで語っているのは、**教会は、この六十六巻を神の御言葉として受け取ります**、という信仰の告白です。この点を忘れてしまうと、第二節は単なる目録になってしまいます。しかし、そうではありません。第二節は、礼拝に集う教会が、「私たちは何に聞

き従って生きるのか」を告白している箇所なのです。信仰告白は、歴史の教科書ではありません。教会の信仰の証言です。そして、その証言は、歴史研究と対立するものではなく、歴史を導かれた神への信頼に立って語られているのです。

十三 聖書が教会を生み出す

ここまで、正典の形成について学んできました。その中で繰り返し確認してきたことは、「正典は長い歴史の中で形成されてきた」ということでした。この事実を知ると、中にはこのような疑問を抱く方がおられるかもしれません。「それなら、結局、教会が聖書を作ったということではないでしょうか」。確かに、そのような考え方もあります。実際、現代では、「聖書は教会という共同体が生み出した文学作品である」という説明を目にすることがあります。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、まったく逆の方向を向いています。信仰告白が語ろうとしているのは、教会が聖書を生み出したのではなく、聖書が教会を生み出した。ということです。イスラエルの歴史を思い起こしてください。神はまずアブラハムを召し出し、その子孫を一つの民とされました。そしてシナイ山で契約を結び、その契約の言葉をモーセに与えられました。イスラエルは、自分たちで契約を作ったではありません。神の語りかけによって神の民となったのです。新約の教会も同じです。教会は、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられるところに誕生しました。使徒たちは、自分たちの思想を語ったものではありません。神がキリストにおいて成し遂げられた救いの出来事を証言しました。その証言が教会を生み出しました。したがって、教会は常に御言葉の上に立つ共同体です。教会は御言葉を支配することはできません。むしろ、御言葉によって絶えず吟味され、改革され続ける共同体なのです。宗教改革者たちが語った「改革された教会は、神の御言葉によって絶えず改革され続ける教会である」という言葉も、まさにこの理解に立っています。

十四 現代の私たちへの問いかけ

最後に、今日の学びを私たち自身に結び付けて考えてみたいと思います。私たちは、日曜日になると礼拝に集まり、聖書が朗読され、説教を聞きます。しかし、それは長い教会の歴史の中で当然のこととして続いてきた習慣だからではありません。教会は、「この六十六巻を神の御言葉として聞く」という信仰の告白に立って礼拝をささげています。もしこの告白が失われるなら、説教は単なる宗教講演となり、礼拝は宗教的集会になってしまいます。礼拝を礼拝とするのは、神が今も御言葉をもってご自身の民に語りかけてくださるという信仰です。だからこそ、ウェストミンスター信仰告白は、第一章の冒頭で聖書について語ります。教会論よりも先に。礼拝論よりも先に。救済論よりも先に。まず、「神は語られる」という事実を告白するのです。ここに改革派神学の特徴があります。すべては神の御言葉から始まります。教会も。信仰も。礼拝も。宣教も。御言葉によって生まれ、御言葉によって養われ、御言葉によって導かれていくのです。ですから、私たちが聖書を読むということは、単に知識を増やすことではありません。神の民として生きるために、神の声に耳を傾けることなのです。その意味で、第二節は「どの本が聖書か」という目録ではなく、「私たちはこの御言葉に聞き従って生きます」という教会の信仰告白なのです。

本日のまとめ

今日は、ウェストミンスター信仰告白第一章第二節を通して、教会が受け継いできた六十六巻の聖書について学びました。特に三つの点を確認しました。第一に、正典とは、教会が権威を与えた書物ではなく、神の権威をもって教会に与えられた書物であること。第二に、正

典形成は一度の会議で決まった出来事ではなく、神の民の歴史の中で成熟していった歩みとして理解されるべきであること。そして第三に、教会は聖書を生み出した共同体ではなく、聖書によって生み出され、養われ、導かれる共同体であることです。この告白は、十七世紀のウェストミンスター会議だけのものではありません。二十一世紀に生きる私たちもまた、この同じ告白に立って礼拝をささげています。神は今も、この聖書を通して教会に語りかけてくださいます。

今回は、第一章第三節を学びます。ここでは、外典（第二正典）とは何か、宗教改革者たちはなぜそれらを正典として受け入れなかったのかを学びます。同時に、外典を単に「読む価値のない書物」と考えるのではなく、第二神殿時代ユダヤ教を知るための重要な歴史資料として、どのように評価すべきかについても一緒に考えたいと思います。